

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

がん研有明病院大腸外科での研修を終えて

大津赤十字病院外科

甲津 卓実

この度、日本臨床外科学会の国内外科研修プログラムにて令和3年2月1日から2月19日までの3週間、がん研有明病院大腸外科で研修をさせていただきました。貴重な機会を与えていただいた日本臨床外科学会の万代恭嗣会長、国内外科研修委員会の高山忠利委員長に厚く御礼申し上げます。また、ちょうど2度目の緊急事態宣言が発令された頃で、世の中は混乱し、各医療現場もひっ迫していたさなか、今回の研修を受け入れていただいたがん研有明病院の佐野武病院長、大腸外科部長の福永洋介先生をはじめ、スタッフ、レジデントの先生方にもこの場を借りて心より感謝申し上げます。

私は、初期研修より現在の天津赤十字病院で勤務しておりこれまで他施設で手術等を見学する機会はほとんどありませんでした。卒後7年目を迎えるにあたって今後の進路を悩んでいた時期に、当科部長の土井隆一郎先生より今回のお話をいただきました。当科では領域問わず症例を経験させていただいていましたが、今後大腸領域でさらなる研鑽を積みたいたいと考えていたため、日本でも有数の症例を誇るがん研有明病院大腸外科を研修先として選択させていただきました。

研修期間中は、手術見学と各種カンファレンスへの参加を主に行いました。多い日で1日5～6件とその全てを見学することは出来ませんでした。大腸癌に対する腹腔鏡下手術をはじめ、ロボット支援下手術、時には開腹手術と幅広く手術を見学させていただきました。徹底的にドライな視野にこだわり、定型化された視野展開、迷いのない切離、自身が高難度と感じていた手術があっという間に終わる様子に感銘を受けました。定型化された視野展開、手術チームで共通認識を持つことの重要性を再認識しました。前治療がなされている症例や狭骨盤等の困難症例における視野展開においては、大きな展開にこだわらず、ピンポイントの術野を作り操作することでスムーズに手術が進んでいました。限られた期間でしたが、2度の骨盤内臓全摘術も見学することが出来ました。その際は経肛門からのアプローチも併用され、普段見ることのない術野を経験し、骨盤解剖の理解を深めることが出来ました。

毎週行われる大腸外科、消化器外科カンファレンスでは、各症例が簡潔にまとめられ、科を越えてevidenceに基づいた活発な議論がなされていました。その質の高さには驚くばかりでした。特に進行下部直腸癌における治療戦略についてはhigh volume centerならではの最新の知見が得られ、非常に興味深いものでした。質の高い大腸癌診療のためには手術だけでなく、内視鏡所見や病理所見に対する知識、治療においては化学療法や放射線療法などにも深い知識が必要であると痛感しました。

研修期間中の多くを、レジデントの先生方と過ごさせていただきましたが、一施設での経験しかない私にとって近い世代の先生方の姿は非常に刺激となりました。毎回手術の後には、反省点や次回への改善点を熱く話し合っておられ、切磋琢磨されている姿は印象的でした。非常に多くの執刀機会があるものと想像していましたが、決してそうではなく、そのためレジデントの先生方は1症例1症例を非常に大切にされていました。私自身反省すべき点ですが、これまで比較的執刀経験をいただいております最近ではそのような意識が欠けていたものと感じます。

気づくとあっという間に3週間が経過していました。非常に多くのことを学び感じた大変充実した研修期間でした。今後の外科医人生にとっても大きな財産になったものと思います。このような国内外科研修の機会をいただけることは若手外科医にとっては非常に意義のあることと感じました。この研修で

得たことを共有し、今後の診療に生かしていきたいと思えます。

最後になりましたが、研修期間中ご迷惑をおかけした当院外科のスタッフの先生方にはこの場を借りて心から感謝申し上げます。